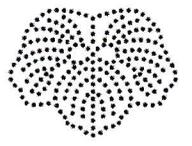


「リウマ伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に向う。という気持ちでお届けいたします。



# リウマ伝

75号  
2026年2月26日  
高野竜馬

## 「恩人の最期」

昨年末、12月30日に、仕事を教えてくれた恩人Nさんが亡くなりました。享年89歳。

Nさんとは前職の代理店で一緒にお仕事をさせて頂き、私が独立してからは2年ほど音信不通だったのですが、ひょんなことから私がお客様を引き継がせて頂くことに。

一昨年の秋、肺がんが発覚し、11月だと知らされて、20年は正月も迎えられないかもと言われながら、そこから一年以上お元氣でした。

ホスピスに入るといふ知らせを受けたのが昨年11月。すぐに駆けつけ、病室で2人きりで話しました。

「もうこれでオサラバたい」と笑顔ながらも涙目で(最後に)「何をしたいですか?」と聞くと、「みくな(お客様と)会いたい...」

それでお付き合いの深かたお客様に私が連絡すると「アッ」という間に沢山の方がお見舞に行かれました。

生前、「24時間24日、いつでもご連絡ください」と公言し、本当にそうしていたNさんならではです。

すると奇跡が起こるのです。2週間後にお見舞いに行くと酸素ホンを抱えながら、明らかに顔色が良く、表情も豊かかのです。

たまたま入ってきた主治医が一言。「Nさん、とても調子が良そうですね。近いうちに退院の話をお願いしますか。ご家族を呼んでください。」

「えっ、ホスピスで退院する人、初めて見ました。最も親交の深いお客様は「お前が危い、マいうから、ウチは一家全員で行ったのに、どげんしてくれとや」とお叱りを受けたのも今となれば良い思い出。そこから1ヶ月ほどで天国へ旅立たれました。

Nさんのご長男さんとはご葬儀の日が初対面。「子どもの頃は遊んでもらった記憶があまりなく、休みでも深夜でもお客様が事故だと知ると即座に駆けつけるので、父は警察官だと思っていました。」とおっしゃっていたのが、心に突き刺さりました。そんなご苦勞の上に、今の私が成り立っていることに、深い感謝の念が湧いてきました。

葬儀は大晦日。家族葬で遺族以外の参列者は私と、もうお一方のみ。大晦日前日を命日に選び、「お客様に知らせず香典も受け取らないように」と言い残されていました。

日取後の日取後まで「奉仕」に徹底された人生でした。「見事な死」にようをした人である。は見事な一生を歩いた人である。或る本の一節が肚に落ちると同時に、自分自身の「最期」も考えさせられた大晦日でした。



たかの財形事務所  
〒819-0374 福岡市西区千里 707-13  
☎090-3407-2123  
<https://www.takanozaikei.com> x-1l fp.takano@gmail.com